

カラバルガスン碑文に見えるウイグルと大食の関係

Relationship between the Uighur Steppe Empire and the Abbasid Empire as recorded in the Karabalgasun Inscription

吉 田 豊
Yutaka YOSHIDA

Abstract Karabalgasun Inscription is tri-lingual in Old Turkish, Sogdian and Chinese. While the Old Turkish version in Runic script is badly damaged and only small fragments containing a few readable words have survived, substantial parts of the other two versions have remained to this day. Studies based on the Chinese and Sogdian texts have shown that the inscription commemorates the eighth Uighur qaghan (r. 808–821) and his predecessors' military achievements as well as their adoption and support of the Manichaean religion and church. It is no doubt one of the most important sources for the history of the Uighur Steppe Empire and the study of Manichaeism in China and Central Asia.

Translation of lines 20–22 of the Sogdian version in my latest edition of the Sogdian version reads as follows: “Further, in the entire Tajik (=Islam/Abbasid) realm, there were strikes(?) and persecution. When the fortunate ruler proceeded downward (=westward), he sent an order to the amir of Khorasan, and to [many other] local amirs and rulers. They [... ..] auditors [... ..] up to Mumin Amir (=the Abbasid caliph), because of the [repect] and fear of the fortunate ruler, so many times they sent mighty nobles(?) (and) eminent offerings.” The Chinese version also records that the Uighurs attacked the Tibetan and Qarluq soldiers and chased them to the Jaxartes (column XVII), Ferghana (column XX), and the realm of Tajiks or Dashiguo 大食国 (column XIX). In the inscription all these achievements were recorded as accomplished by Tian Kehan 天可汗 or *prnpδy/prnxwnk 'xšy-wn'k* “glorious king”, who is to be identified with the seventh qaghan (r. 795–808).

In this paper, while referring to what one finds in Islamic sources in connection with Toquzoghuz or the Uighurs, the present author discusses the relationship between the Uighur Steppe Empire and the Abbasid Empire as recorded in the Karabalgasun Inscription. The discussion supports Karev's (2015) view to refute the Uighurs' active involvement in Rāfi' b. Layth's Rebellion proposed by Yoshida 1988 and de la Vaissière 2007. In the present author's argument, Minorsky's 1948 now generally accepted dating of Tamīm b. Baḥr's journey to the Uighur court in Mongolia to 821 CE can no longer be supported, because Minorsky's dating was based on a few erroneous assumptions, one of which is that Tian Kehan is the designation of the eighth qaghan.

Keywords Karabalgasun Inscription (カラバルガスン碑文), Uighur Steppe Empire (東ウイグル可汗国), Rāfi' b. Layth's Rebellion (ラーフィー・イブン・ライスの乱), Abbasid Empire (アッバース朝), Qarluqs (カルルク)

はじめに¹⁾

カラバルガスン碑文（以下 KB 碑文と略す）とは、現在のモンゴル共和国のオルホン河流域にあったカラバルガスン遺蹟で見つかる、3言語（トルコルーン文字表記ウイグル語、漢文、ソグド語）併用の碑文である。ウイグル語版は小断片を残すのみで、内容の理解に資すところがない。最も保存状態が良い漢文面でも全体の3分の1程度、ソグド語版では4分の1程度が残されているだけである。漢文面とソグド語版に残された表題から、東ウイグル可汗国の第8代保義可汗（在位 808-821）を記念する碑文であることが知られている。筆者は森安孝夫氏（現在は大阪大学名誉教授）とともに、長年にわたってこの碑文の漢文面について共同研究を続けてきたが、その成果が近く出版される運びとなった。ただ漢文のテキストと翻訳・訳注を主眼とするその研究論文では、主にソグド語版の解釈に関わる事柄について扱うことができなかった。本稿で扱う問題もその一つである。

さて KB 碑文の漢文面には、「XVII：天可汗躬惣師旅，大敗賊兵，奔逐至真珠河。俘掠人民，萬萬有餘。駝馬畜乘」；「XX：追奔逐北，西至拔賀那國，剋獲人民，及其畜産」のように、真珠河や拔賀那國のような、当時はイスラム圏に属していたと考えられる地名が見える²⁾。また、ソグド語版の20行目の終わりから22行目の始めにかけて、以下のように記されている：「(20行) そしてまた全大食の(21行) (1) 領土に、弾圧(?)と迫害があった。それで栄光ある帝王は下方へ(=西方へ) 赴かれたときに、ホラーサーンのアミールと他の(2) 多くの国々のアミール及び支配者たちに命令を發した。彼ら[…中程度の破損… (6)] 聴者たち(=マニ教の一般信者たち)[…大きな破損… (7)] カリフまでもが帝王に対する(22行) (1) [敬] 意と恐怖から、何度も有力な貴人たち(?)と莫大な貢ぎ物を送ってきた。」³⁾ 東ウイグル可汗国と当時のアッバース朝との接触を示唆するような記事は、イスラム史料に反映されているのか、もし反映されているとしたら、どのように記録されているのかは興味深い問題である。本稿ではこの問題について、現在知られていることをまとめておきたい。

I KB 碑文と大食との関係についての従来の見解

ソグド語版に大食の記事が存在することは1988年の吉田の研究で始めて明らかにされた

-
- 1) 投稿された本論文の原稿の初歩的な誤り等を査読者から訂正して頂いた。記して謝意を表す。むしろ未だに初歩的な誤りがあるとすればすべて筆者の責任であることは言うまでもない。
 - 2) 漢文テキストは、森安・吉田が準備している研究から引用している。ローマ数字は漢文版の行数を、テキスト中の斜字体は破損した文字、太字は破損した部分の推補であることを示す。この部分を含む関連する箇所ソグド語テキスト、並びに漢文テキストと読み下し文は、末尾の附録を参照せよ。
 - 3) ソグド語版の翻訳の中の(1)や(2)などは、当該の文が残されている石の断片の番号である。

が、漢文版の方は古くから知られている。これ以前に、ウイグルとイスラム圏との接触に関して、従来どのように考えられてきたかを最初に見ておこう。

安部健夫は名著『西ウイグル国史の研究』（京都 1955）のなかに「アチ王朝の西方経営」（pp. 200-228）という一節を設けて、懐信可汗（795-808）即位後のウイグルの西方経営について論じている。実際、碑文の漢文面の XIV 行目に北庭争奪戦の記事が見え、それ以降、碑文に見える地名には亀茲（クチャ）（XVI）、真珠河（シル河）（XVII）、拔賀那（フェルガナ）（XX）がある。このように記事は時の経過を追ってタリム盆地の北東側からその西方へ移行しているように見える。従来の見解に反して、天可汗を懐信可汗と見なす安部は、懐信可汗の頃ウイグルの勢力はアッバース朝の勢力圏に接する場所まで及んでいたことに注目していた。

安部は、真珠河（XVII）と拔賀那（フェルガナ）（XX）の記事に関して、タバリーのヒジュラ暦 205 年（820 年 6 月 17 日～821 年 6 月 5 日）の記事に「ウイグルがウスルーシャナに到着した」とあることと関連づけていた⁴⁾。実際のところ KB 碑文のこの二つの事件をタバリーの記事と関連づけることは、羽田亨が既に行っており [羽田 1919: 379-380]、その点では Haloun に KB 碑文の漢文面を読んでもらっていた Minorsky も同じであった [Minorsky 1948: 300]。Minorsky は Tamīm b. Baḥr がウイグルの宮廷に行った際の記録から、そのウイグルの宮廷が、旅程から見て西ウイグル国の首都の北庭ではなく、オルホンにあった東ウイグル可汗国の宮廷であることを証明した。その上で、Tamīm b. Baḥr のウイグル訪問とタバリーの記事と関連づけたのであった。その際、Tamīm b. Baḥr が 5 ファルサンク（約 30 km）離れた場所からでも見ることが出来たという、城の上に設置され 100 人を収容できる可汗の黄金のテントを、『新唐書』のキルギズ伝のなかで、キルギズの可汗がウイグル可汗を脅迫して、「なんじの運命はこれまでだ。私はなんじの金帳を手に入れ、なんじの帳舎の前でわが馬を走らせ、わが旗を立てよう」と言った言葉の中の金帳がそのテントであるとした [Minorsky 1948: 294-296]⁵⁾。ウイグルの可汗と唐の公主との婚姻や唐から大量の絹を手に入れていることも Tamīm b. Baḥr は記録していて、Minorsky は、金帳は婚姻に際して中国の職人が製作したものと考えた。そしてこのことが、Tamīm b. Baḥr の訪問を 821 年に比定する根拠になるとしていた⁶⁾。

4) 原文の英訳は “Toghuz-Oghuz arrived in Ushrusanah.” である（下記参照）。

5) 『新唐書』の記事は「爾運盡矣。我將収爾金帳，於爾帳前馳我馬。植我旗」。ここに引用した和訳は [佐口他 1972: 455] から。この記事については J. K. Skaff [2012: 150-151] も参照せよ。

6) Minorsky 1948: 300. Minorsky 自身は慎重で、言及された絹布の数量から考えれば、昭礼可汗（位 824-832）の時代の 827 年、唐の文宗の時のほうが、可汗が Tamīm b. Baḥr に会った年次としては相応しいが、タバリーの 821 年の記事があるのでその考えは採用しないとしている。ちなみに Minorsky が黄金のテントを中国の職人が製作したとすると、彼は次のように表現している：As this qaghan (崇徳可汗 821-824 のこと, YY) who, with extraordinary pomp and circumstance, was given the hand of the Princess T'ai-ho (太和公主, YY), the golden tent, probably of Chinese workmanship, may have been brought on that occasion. ウイグルの可汗の金

安部の懐信可汗と天可汗を同一視する説は、必ずしも学界で受け入れられた定説になることはなかった。ちなみに、安部はタバリーの記事を懐信可汗の事績と関連づけることの問題点は認識していて、タバリーの記録には年代の点で誤りがあるのではないかとさえ言っている [安部 1955: 211-213]。従来は天可汗が保義可汗 (808-821) であるという前提であったから、その前提に従う Beckwith は 1987 年の段階で、KB 碑文に見られる関連する記事について、下のように言っている。伝統的な解釈の代表として、やや長く引用する [Beckwith 1987: 165]。

The Uyghur Empire had by now expanded to its greatest east-west extent. In the late spring or early summer of 821, an Uyghur army appeared in Uśrūsana, apparently after attacking a Tibetan and Qarluq force to their west and chasing them across the Jaxartes into Ferghana, where the Uyghurs collected great quantities of plunder from the local people. It was also probably in that year that the Arab envoy, Tamim b. Baḥr, traveled to Ordubaliq via the Uyghur-controlled lands near Talas, the Issyk Kul, and Jungaria.

この部分の脚注 145 では次のようにも言っている。

The fate of the Tibetan army is unknown. The Karabalgasun inscription does not allow absolute dates to be determined for the events it describes. Such a major Uyghur expedition into Arab-dominated territory should have been noticed by the Arab chroniclers, hence my assumption that the entry in Ṭabarī (see note 143) refers to this event.

KB 碑文の記事から絶対年代は分からないという認識と、イスラム圏へのウイグルの侵入は、必ずイスラム史料に記録されているに違いないという信念が、タバリーの 821 年の記事と関連づける理由だと明言していることは注目される。実際彼は、XVII 行目と XX 行目の記事の一つながりの事件の記録として理解し、それをタバリーの 821 年の記事と結びつけるような強引な解釈を行っている。紀年のない KB 碑文の記事を史料として利用することの難しさを如実に示している。

なお吉田 1988 では、ソグド語版に大食が言及されていることから、漢文版の XIX 行目の破損部に大食という名称が読み取れる可能性を指摘した。そして論文中に「東ウイグル可汗国とイスラム勢力との接触」という短い一節を設けて、この問題について考察した。当時、漢文版の天可汗が懐信可汗ないし保義可汗のどちらであるかについて不確定であるという認識のもと、カルルクとチベットが現れることから、806-810 年に起きた Rāfi' b. Layth の乱との関連を示唆した。下でも見るように、この乱では、Rāfi' b. Layth が援軍を求めた勢力としてカルルクやチベット以外に、Toghuzghuz すなわちウイグルもあげられており、その状況が KB 碑文の内容とよく合致すると考えたからであった。

↘ 帳が出来た年次や経緯についての説明としてはあまりに根拠が薄弱で、彼自身 “may have been” と表現しているほどである。しかし何の根拠もないこの憶測が、年代決定において極めて重要な役割を果たしていることは遺憾である。

2000年に公刊された著書のなかで華濤は、カルルクとウイグルの戦いという一節を設けて、KB碑文の記事を検討している〔華濤2000:13-24, 31-34〕⁷⁾。彼は「天可汗」は保義の即位前の一種の尊称であるとみなし、即位の記事はXVIII-XX行目の欠損部にあったと考えている。そしてXXI行目の「□姓毗伽可汗」は保義可汗が正式に可汗の位に就いたことを示すと考えた。彼はまた791年の北庭戦で破れたカルルクは西のフェルガナまで移動し、その結果792-793年にホラーサーン総督はAmir b. Jamilを派遣し、カルルクをフェルガナから掃討することになったのだとしている。この記事はGardiziに見えるという。このように華濤はXX行目までの記事を、保義の即位以前の795年頃までに比定する（『上掲書』p.13）。一方XXI行目以降は即位後の事態に関係し、Rāfi' b. Laythの乱の後、即位前のカリフMa'mūn(813-833)が異母弟のAmin(809-813)と対立し、ウイグルに援護を求めようとしていたという記録と関係づけ、808-810年頃に比定する（『上掲書』p.23）。なおカリフMa'mūnに関するこの記録は下で詳しく見る。

古い時代の研究では田坂興道もイスラム勢力とウイグルとの関係について触れている〔田坂1941:212-213〕。田坂はMarquartに依拠して、カリフal-Mahdī(775-785)が派遣したアッバース朝に朝貢を勧める使節が、ウイグルにも送られているとするYa'qūbīの記録に言及し⁸⁾、以下のように言っている：「牟羽可汗の時代は、名実共に回紇の覇権が確立した時代である。しかし、かれの西方拓疆のことは、支那史料及び九姓回鶻可汗碑からは全く得られぬが、西方所伝によれば、回教紀元162年（西紀778-779年・牟羽治世第20-21年、唐大暦13-14年）頃には回教国の首長al-Mahdīと政治的関係を生じて居る。」ただその後の研究でも、牟羽可汗時代にウイグルがイスラム圏にまで勢力を伸ばしたという事実は確認されていない。とはいえYa'qūbīの記事をどう理解すべきかはTamīm b. Baḥrのウイグル宮廷訪問との関連で再考する余地があり、Minorskyは、この記事にも注目している〔Minorsky 1948:301〕。

天可汗を誰に比定するかの問題と、懐信可汗から保義可汗への継承記事の問題に関する森安・吉田の見解は、共同論文に於いて詳しく論じる。ここで関連する要点のみを述べれば、碑文の漢文面のXI行目の終わりからXXII行目までは、天可汗と呼ばれた懐信可汗時代の事柄が記録されていて、XXII行目の直後付近に懐信から保義への継承が記されているという理解である。今回我々はさらに、XXII行目にある意味不明の「**𐰽𐰺𐰍** 𐰽𐰺𐰍」を、カリフを意味するアラビア語からの借用語で、ソグド語版に見えるmwmyr xm'yrに対応する表現であると考えた⁹⁾。またソグド語版ではもっぱら保義可汗の事績が記録されていると考えられ

7) ちなみに華濤は〔吉田1988〕の考えについてRāfi' b. Laythの乱に関するアラビア語史料を正しく理解していないと批判している。下でも述べるようにこの批判はY. Karevがde la Vaissièreに対して行ったのと基本的に同じものであり、正しい。

8) 具体的にはYa'qūbī, *Ta'rikh*, ii. 479である。これについては下記を参照せよ。

9) ソグド語の形式はamir al-mu'minin「信者たちの長」からの借用語である。要素の順序が逆に

submitted to him. Among them were the king of Kābul Shāh, whose name was Ḥanḥal ; the king of Ṭabaristān, the Iṣbahbadh ; the king of Soghdia, the Ikhshid ; the king of Ṭukhāristān, Sharwīn ; the king of Bāmiyān, the Shīr ; the king of Farghāna,----- ; the king of Ushrūshana, Afshīn ; the king of the Kharlukhiyya, Jabghūya ; ¹³⁾ the king of Sijistān, Zunbīl ; the king of Turks, Ṭarkhān ; the king of Tibet, H-h-w- r-n ; the king of Sind, al-Rāy ; the king of China, Baghbūr ; the king of India and Atrāḥ, Wahūfūr ; and the king of the Tughuz-ghuz, Khāqān. [Gorden et al., p. 1139]

(2) Ya'qūbī, *Ta'rikh*, ii. 538 [after 190/806]

([Al-Rashīd] had sent Harthama b. A'yan with an army to Samarqand to fight Rāfi' b. al-Layth. He found that Rāfi's following had grown enormous : he had won over the people of al-Shāsh and Farghāna, the people of Khujanda, Ushrūshana, al-Ṣaghāniyān, Bukhārā, Khwārazm, Khuttal, and other districts of Balkh, Tukhāristān, Soghdia, and Transoxania, as well as the Turks, the Kharlukhs, the Toghuz-ghuz, the forces of Tibet, and others. He relied on their backing to fight against the governing authority (*sultān*) and to kill Muslims. He made his way to the city of Samarqand and fortified himself there. Harthama pressed the war against him, killing a number of Rāfi's followers. Rāfi' then sought help from Jabghūya of the Kharlukhs. This Jabghūya, who had converted to Islam under al-Mahdī, sought to deceive Harthama by leading him to believe that he was his ally, when in truth his support and leaning were for Rāfi'. Now he openly declared his determination to revolt and depose the caliph, and Rāfi's position was greatly strengthened. Rāfi' set fire to the black banner, declared himself free of all ties to its supporters, and called for a non-Hāshimite leader. Harthama moved to suppress the movement, until Rāfi' requested a settlement, which Harthama granted to him. Rāfi' presented himself to him, along with his sons, his household, and his property in Muḥarram 194. Al-Ma'mūn wrote to Muḥammad (al-Amīn) with news of the victory. He informed them of his careful planning and determined effort that had led to his God-given victory. [Gorden et al., p. 1139]

(3) Ṭabarī, iii, 1044 [820. 6. 17~821. 6. 5]

In this year, Ṭāhir b. al-Ḥusayn set out for Khurasan in Dhū al-Qa'dah (205 [April-May 821]). He remained (in his encampment) for two months until news of 'Abd al-Rahmān al-Naysābūrī al Muṭṭawwī's outbreak (khurūj) at Naysābūr reached him, and then he left. Toghuz-Oghuz arrived in Ushrūsanah. [Bosworth 1987 : 106-107]

13) この史料ではカルルクの支配者の称号を Jabghūya と明記していることは注目される。これは KB 碑文の漢文版の葉護, ソグド語版の yprw に対応している。

(4) Tamīm b. Baḥr の旅行記

B. al-Faqīh の *Kitāb al-buldān* の Mashhad 写本に残された Tamīm b. Baḥr の旅行記は Minorsky 1948 が詳しく分析した。旅程の記述から、タラス付近の下 Barskhan から、ウイグルが提供する駅馬によってオルホンにある東ウイグル可汗国の宮廷に訪問したことを明らかにした上で、その時代を上記の 821 年の事件と関連づけた¹⁴⁾。

(5) Ibn Khaldūn

Y. Karev は、Ibn Khaldūn が Hārūn ar-Rashīd 時代の歴史の中で、ヒジュラ暦 188 年 (803. 12. 20~804. 12. 7) に、'Ali b. Īsā が khāqān に戦争をしかけ、khāqān の兄弟を捕虜にしたと記録していることを指摘した [Karev 2015: 309]。Karev は Toghuzughuz とは記されていないが、事件が起きた年代と場所から、ウイグルの西征と関連づけられるとしている¹⁵⁾。

III KB 漢文に見える記事の年代比定

I コータン語文書の利用

KB 碑文の記事だけからは絶対年代を知ることができない。しかし天可汗を懐信可汗 (795-808) に比定することによって、ソグド語版で記録された事件のうち (i) は懐信可汗の生存中の末期、(ii) は保義可汗 (808-821) の時代であったことが知られる。上で引用した漢文版の (a)~(d) は全て懐信可汗の時代であったことは知られているが、絶対年代はどうかであろうか。Yoshida 2009 は、紀年があり絶対年代が明らかになっているコータン語の世俗文書に記録された事件と比較すれば、KB の漢文面の (c) の年代は比定できる可能性があることを指摘した [Yoshida 2009]。(c) では敗走するカルルクとチベットの軍隊を西に向かって追跡しフェルガナに至ったとある。Yoshida 2009 は、追跡が東から西に向かっていることから、ウイグルはカルルクとチベットの連合軍とカシュガル付近で戦闘を行い、敗北し南北への退路を断たれたカルルクとチベットが、フェルガナに追い詰められた状況を想定した。

ところで西暦 802 年 (コータン王尉遲曜の 36 年) のコータン語文書 (Hedin 20a) は中国暦の 8 月 21 日の日付がある。この文書は、現在のドモコ付近にあった六城州の知事へのコータン王からの命令 (8 月 20 に出された) の内容を伝える。Zhang Zhan 2018 による最新の翻訳を引用する [Zhang 2018: 61-62]¹⁶⁾。

14) この事件の歴史的背景については下記も参照せよ。

15) 本稿の査読者からは、Karev が指摘する記事が、イスラム史料の中では孤立した記事で、他に典拠がない点で十分信頼できるかどうか議論する必要があることを指摘して頂いた。ただ残念ながら筆者にはこの問題について論じる能力がない。査読者も述べておられるように、Karev 自身がその点にもう少し配慮すべきであるのであろう。

16) Yoshida 2009 では Bailey 1961 のテキストと翻訳を利用していた。その後 Skjærvø は Yoshida 2009 の元になった口頭発表 (2006 年 3 月於ベルリン) の原稿を参考にして、この時期の関連する

§ 1 On the 21st of Barmkhaysja (the eighth month), an order from the Gracious Lord came to us, (saying) : § 2 “To *tsīṣī spāta* Sudārrjām : § 3 [Now], Military Commissioner *blon* Lha bzher and other masters told us : § 4 ‘Previously, *blon* Tsa-bzang gave you a document, (saying) : § 5 “The Chinese Lā Tejin intends to lead an army of 2,000 to Khotan to you.” § 6 But last night, a document sent by *blon* Tsa-bzang among the Kashgarian came, saying : § 7 “The Huns have passed over Ttumgašem in Kashgar, (and are now going to) you.” § 8 But it did not (say) how many have passed or on which day they passed, (heading for) us.’ § 9 When you hear the order, transfer all men and cattle into the Fort of Phema. § 10 Then send orders to every town. § 11 Those who have more cattle (and) those who have no cattle, help one another so that they (those who have more cattle) do not transfer them (their cattle) unloaded into the fort. § 12 Transfer the grain with you. § 13 On the 20th day of Bramkhaysjā in the 36th regnal year the order went out to you.” Signum-SUa

コータン王の命令は、六城地区の住民と家畜の避難指示である。これはコータンを軍事的に制圧していたチベット人の *blon* 「大臣」からの知らせに対する対応であったが、その知らせはカシュガル付近での Huna 「(原義) 匈奴」の動静と関係している。要するに Huna がコータンに攻めてくる怖れがあることを伝えている。この時期にタリム盆地の北側でチベット軍とウイグル軍の大規模な戦闘が行われていたことから、この Huna はウイグルを指すことが推定される。実際 Huna という語は匈奴を原義とするが、後の時代の中央アジアではモンゴル高原に由来する遊牧民の呼称となっていたことを de la Vaissière は種々の根拠をあげて証明した [de la Vaissière 2005]。例えばムグ文書では突厥(具体的にはトゥルギシュ)を *xwn* と呼んでいる¹⁷⁾。Yoshida 2009 は、Hedin 20 に記録された出来事を、上記の (c) すなわち KB 碑文の XX 行目の記事と関連づけ、802 年に比定した。その後、発表されたコータン出土のユダヤ・ペルシア語の手紙にはカシュガルでチベット人がきれいさっぱり殺されたという情報 (*āgāhī i kāšgar ēn hast kū tūpityān rā pāk bi kuštan*(d)) が含まれていた。このユダヤ・ペルシア語の手紙は、1901 年にスタインがダンドンウイリクで発見した手紙の断片と同じ手紙の一部で、それに先行する部分であることが指摘されている¹⁸⁾。スタインが発見した手紙の方は西暦 800 年頃に比定されていたから、新たに見つかった方にある、チベット人が殺されたというニュースは、Hedin 20 に見える事件と密接に関連していたに違いない。

Yoshida 2009 ではそれに先だって、KB 碑文の XVI 行目にある「復、吐蕃大軍、攻圍龜

↙ コータン語の世俗文書を集めて翻訳し直したが、その論文にも Hedin 20 や、下で引用する Hedin 24 も含まれている [Skjærvø 2008]。当然ながら Zhang Zhan の翻訳は更に改善されたものである。

17) ムグ文書の *xwn* を巡るこの解釈については、Grenet 1989 を参照せよ。

18) この手紙については吉田 2017 を参照せよ。

茲。○○天可汗領兵救援。吐蕃■■■奔入于術。四面合圍，一時撲滅。屍骸臭穢，非人■■■。■■■山，以爲京觀」を取り上げ、コータン語文書の Hedin 24 と関連づけて年代の推定を行った¹⁹⁾。クチャでのチベット軍との戦闘の後、ウイグルはこの場合もチベット軍の退路を断って東の于術に追い詰め全滅させた。これはチベット軍にとっては痛手であり脅威であったに違いない。当時クチャ方面から砂漠を南下してコータンに向かうルートが存在していたから、これはコータンにとっても脅威となったであろう²⁰⁾。このルートをコータン側から防御するために、コータンの北 180 キロにあったマザールターグには砦が築かれていた。マザールターグとは、ターグ（トルコ語「山」）という名称からも知られるように小山で、コータンから北流するコータンダリアのすぐそばの要害の地にそびえている標高約 100 m の沙漠中の岩山である。Hedin 24 は、漢文とコータン語のバイリンガルの文書で西暦 798 年、中国暦で閏 4 月 4 日の紀年がある。Zhang Zhan が 2016 年にハーバード大学に提出した博士論文（Between China and Tibet: A documentary history of Khotan in the late eighth and early ninth century）から、漢文とコータン語の文面の英訳を引用する。漢文は原文も引用する²¹⁾。

§ 1 [.....] 乗駝人桑宜本口報稱

(Chinese): ... The camel-rider Samgapuna orally reported that:

(Khotanese): ...

§ 2 聞神山堡 [鼓] [.....] 三舖 [人] 並駝三頭今日卯時到濡馬屈薩

(Chin.): "(I) heard [the drum] of the Citadel in Shenshan. ... at the hour of Mao (5-7 AM) today, three men of the relay posts, together with three camels, arrived at Rumaqusa.

(Khot.): ... the drum continually the camel riders ...

§ 3 [.....] 得消息即走報來者

(Chin.): Once obtaining the message, [I] immediately came to report (it).

(Khot.): When ..., I have brought (the message) here."

§ 4 准状各牒所 [由]

(Chin.): Issue orders to the subordinates according to the report:

(Khot.): When you hear the order

§ 5 [..... 州] 人畜一切盡收入坎城防備

(Chin.): "[...] Collect all the people and cattle into the fort of Kan in defense (of a possible attack).

(Khot.): No matter how many men and cattle you have there in the prefecture, transfer all

19) 引用された漢文テキストの「○○」は 2 文字分の空格を示す。

20) 例えば『新唐書』巻 43 下「地理誌」に含まれる賈耽の記録（標点本 p.1150）には撥換（アクス）から神山を經由して于闐に至る経路が記されている。

21) この博士論文は未発表だが、Zhang Zhan 氏から提供された。記して謝意を表す。

of them into the Fort of Phema.

§ 6 如有漏失 [.....] 罪科所由者。故牒。

(Chin.): If (anyone is) neglected or missing, [...] the subordinates will be punished.”
Thus I issue the order.

(Khot.): ... you will incur severe (punishment for) wrongdoing.

§ 7 貞元²²⁾十四年閏四月四日辰時典史懷仆牒

(Chin.): At the hour of *Chen* (7-9 AM) on the 4th of the intercalary fourth month in the 14th year of the Zhenyuan era, Shi Huaipu the scribe drafted the document.

(Khot.): On the 4th of the second (=intercalary) *Simjsijsa* (the fourth month), the order (went out to you).

§ 8 判官簡王府長史富惟 [謹]

(Chin.): The Administrative Assistant, Senior Secretary in Prince Jian's Establishment, Fu Signum- Wei [jin]

§ 9 節度副使都督王 [尉遲曜]

(Chin.): Vice Military Commissioner, Governor, King [Yuchi Signum-Yao]

コータン王の命令は、漢語で神山と呼ばれるマザールターグにあった砦から、太鼓による緊急の知らせが届いたことに基づき、住民と家畜を坎城に避難させるようにというものである。上で見た Hedin 20 と非常に良く似てはいるが、Hedin 20 より 4 年以前であり、危険を伝える知らせの発信地はコータンの北のマザールターグであることが異なる。コータン国にとっては非常に脅威であつたらしく、日付だけでなく時間までも明記していて、王宮では知らせを受け取った数時間後に住民に対する避難命令を発していることが知られる。このような背景を考慮して Yoshida 2009 は、Hedin 24 の緊急の知らせと KB 碑文の XVI 行目の記事を関連づけたのであつた。

2 カルルクとチベットの連合軍とウイグルの攻防の経過の推定

コータン語の世俗文書を援用したこの年代比定が正しいとすると、チベット及びカルルクとウイグルの戦闘の大凡の経過が推定できる。790 年代の初めの北庭争奪戦の後も、西域北道、すなわちタリム盆地の北側をめぐるチベットとウイグルという中央アジアの両雄の熾烈な頂上決戦は、容易に決着がつかないまま続いた。とは言え、懐信可汗が率いるウイグル軍の優位のもとチベットとカルルクは徐々に西に撤退していった。798 年に、ウイグル軍はクチャでチベット軍に壊滅的な打撃を与えた。チベット軍の方は 802 年にはカシュガルまで撤退したようだ。保義可汗の時代に作成されたマニ教の賛歌集である *Mahrnāmāg* の奥書に

22) この年号の読みは確実ではない。ただしこの文書が 798 年に比定されることに変わりはない。その点については、吉田 2006: 66-67, 92 n. 36 参照。

よれば、カシュガルまでがウイグルの勢力になっていたことが知られる²³⁾。ただしそのウイグルの進撃もカシュガルまでであったと考えられる。これ以降は西域北道をウイグルが、南道をチベットが支配下に置き、9世紀中頃に両国の勢力が衰退するまでその均衡状態が続いた。

なおクチャでの大勝利を伝えるソグド語版の19行目では、長い破損部の後、末尾から20行目にかけて「(そして) マニ教の僧侶と聴者 (=一般信者) たちに大きな安寧をもたらした」とある。牟羽可汗の頃には慕闐の座は焉耆に置かれていたことが知られているが、その後、懐信の時代の803年にはその座は高昌に置かれていた²⁴⁾。ここに言う「安寧」は、ウイグルの領内のより安全な場所に慕闐の座が移設されたことも含意しているのではなかろうか。

しかし漢文面 XVII 行目の記事をみると、一旦は征服されたかに見えた西域北道のオアシスもカルルクやチベットと共同で反撃に転じたようだ。

(XVII) ■■■百姓与狂寇合従，有虧職貢。○○天可汗躬惣師旅，大敗賊兵，奔逐至真珠河。俘掠人民，萬萬有餘。駝馬畜乘，■■■■。■進部■，餘衆來歸。[...]

懐信可汗は全軍を率いて応戦し、カルルク（及びチベットも？）を真珠河（シル河）まで追いやった。ここに言う真珠河がどの付近を指すか明らかではないが、Karev はオトラル付近の可能性もあることを指摘している [Karev: 310]。このときは、北道のアクスあたりから天山を越えてセミレチエにあったカルルクの本拠に入ったと推定される。その結果北道の諸オアシスの王は再びウイグルの命令に従うようになったことが、XVIII 行目には記されているのであろう。

(XVIII) ■■■■知罪咎，哀請祈訴。○○天可汗矜其至誠，赦其罪戾。遂与其王，令百姓復業。自茲已降，王自○朝覲，進奉方物。■■■■■■■■■■廂沓實力 [...] (罪咎ざいきゅうを知り，哀請・祈訴す。天可汗は其の至誠を矜あわれみ，其の罪戾ざいれいを赦す。遂に其の王と与ともに，百姓をして業に復せ令む。茲これ自り已降，王は自ら朝覲し，方物を進奉す。[...] 廂沓實力 [...])

上の(b)すなわち XIX 行目の記事，とりわけ大食国をどのように考えるべきかは難しい問題である。XX 行目にカシュガルから西進して侵入したフェルガナが見えるから，この場合はむしろセミレチエ方面からタラスを越え南進してタシケント方面に入ったのかもしれない。ヒジュラ暦 186 年 (802. 1. 10~802. 12. 29) にはタシケントでイスラムの貨幣が発行されているというから [Karev 2015: 310]，大食の領域と呼ばれるのに相応しいであろう。XX 行目の記事が 802 年の事件に対応するなら XIX 行目はその前年であろうか。少なくとも上で引用した漢文とコータン語のバイリンガル文書 Hedin 24 の紀年である 798 年以降であることは確かである。ウイグルはこの時期になるとタリム盆地の北側だけでなく，セミレチエ方面でも軍事活動を行っており，XX 行目から XXI 行目は，その結果とし

23) 当時のタリム盆地の北側のウイグルの領域についても Yoshida 2009 を参照せよ。

24) 牟羽可汗の頃，焉耆に慕闐の座が設置されていたことに関しては Yoshida 2018 を参照せよ。

て、カルルクのトップで教令に従わない葉護は支配地を去り、元からここにいた黒姓トゥルギシュの毗伽可汗を、真珠智恵葉護（ソグド語版 20 行目の Alp Inçü Bilgä に対応する）として親ウイグルのカルルク（歸順葛祿）の支配者に据えたことを記録しているであろう²⁵⁾。

(XXI) [... ...] 黒姓毗伽可汗。復、與歸順葛祿，冊真珠智恵葉護，爲主。又十箭三姓突騎施 [... ...] (黒姓の毗伽可汗 [...]). 復た歸順せる葛祿の與^{ため}に，真珠智恵葉護に冊して主と爲す。又た十箭・三姓突騎施 [... ...])

ここに至ってセミレチエがウイグルの影響下に置かれることになったと推定される。セミレチエで出土する東ウイグル可汗国のコインはそのことと関係があるであろう²⁶⁾。また Tamīm b. Baḥr が伝えるようなセミレチエとオルホンの宮廷とを結ぶ馱馬もこのときに整備された可能性が高い。

ちなみに「葉護が教令に従わないために（葉護為不受教令）」と言われている葉護は，Ya'qūbī, *Ta'rikk*, ii. 538 において，カリフの Mahdī の手によってイスラムに改宗したとされるカルルクの Jabghūya に違いない²⁷⁾。彼は後に 809 年には Rāfi' b. Layth の乱に際して，Rāfi' の側に立ち Hārūn ar-Rashīd が乱の鎮圧の為に派遣した Harthama と戦ったという [Karev 2015: 312]²⁸⁾。この時期は懐信が死んだ直後の時期にあたるので，ウイグルの影響力は緩んでいたのかもしれない。またこの空格を伴わない「教令」は懐信可汗の命令ではなく，マニ教の教えのことなのかもしれない。

IV ソグド語版の大食関係の記事と漢文版 XXII 行目の記事の歴史的背景

1 de la Vaissière と Karev の考え方

ソグド語の 20 行目の終わりから 22 行目の始めにかけての記事の日本語訳を，ここでもう一度引用する。

「(20 行) そしてまた全大食の (21 行) (1) 領土に，弾圧(?)と迫害(?)があった。それで栄光ある帝王は下方へ(=西方へ) 赴かれたときに，ホラーサーンのアミールと他の (2) 多くの国々のアミール及び支配者たちに命令を發した。彼ら [...大きな破損... (6)] 聴者たち(=マニ教の一般信者たち) [...大きな破損... (7)] カリフまでもが帝王に対する (22 行) (1) [敬]意と恐怖から何度も有力な貴人たち(?)と莫大な貢ぎ物を送ってきた。」

25) この間の事情は吉田 2011: 17-19 に於いて詳しく論じた。ただし、「歸順葛祿」の支配者にされた真珠智恵葉護が，黒姓毗伽可汗その人であったかどうかは現存する史料からは確認できない。

26) このコインについては吉田 2018: 161-164 を参照せよ。

27) 彼の改宗の背景に，牟羽可汗のマニ教に対する対抗心を想定することができるだろうか。

28) 従って懐信は長年この葉護が率いるカルルク勢と戦っていたことになる。

この記事に対応するように見えるのは、最近の森安・吉田の解釈に従うと、漢文版の XXII 行目であり、そこにはカリフを意味する表現が見え、マニ教徒に関する表現がそれに先行している。もう一度 XXII 行目を引用する。

[... ..] 寺宇，令僧徒寛泰，聽士安樂。自闕法來，**闕**■**闕**名，未曾降伏 [... ..]

比較的に保存状態が良いソグド語版に従えば、アッバース朝下でマニ教の弾圧があり、それを阻止するために可汗が西方に赴き、ホラーサーン総督や他の地域のアミール及び土着の王に命令し、その結果(?) カリフまでもが朝貢してきたということであつたらしい。時代は 802 年に比定したフェルガナへの侵入 (XX 行目) や、おそらくその後にあつたセミレチエにおけるカルルクの処分 (XXI 行目) 以降、懐信の死 (808 年 4 月) までの間である。吉田は、2003 年に行った Collège de France の講義では、ソグド語版の当該の記事は、懐信可汗の支配年を考慮すれば Rāfi' b. Layth の乱の時に比定するのが妥当であろうとしたが、それは消去法的に到達した推定であつた。

de la Vaissière は 2007 年の著書の第 4 章の Rāfi' b. Layth の乱を扱う一つの節においてこの問題について論じたが [de la Vaissière は 2007: 126-131]、その際はこの Collège de France の講義で吉田が行つた推定を積極的に展開した。彼によれば、サマルカンドを初めとするソグドの住民は、Rāfi' b. Layth の乱に乗じてウイグルを味方に取り込み、かつてのシルクロード交易による繁栄を復活させようとしたのだという。その際、絹馬交易によって莫大な量の絹を中国から手に入れていたウイグル可汗国内部のソグド人との連繫も関与していたと、彼は考えた。

このシナリオを真っ向から否定したのは Y. Karev であつた。彼は 2015 年に出版された著書において、“Les Turcs et le problème d'interprétation de l'inscription de Qarabalgasun” という比較的長い一節を設けて、吉田が Karev に提供した 2012 年当時のテキストと翻訳を参照し、かつ漢文版の内容も含めて詳しく論じている [Karev 2015: 304-313]。彼によればソグドの土着の住民が乱に積極的に関与した事実はないと言い、また、乱の鎮圧のためにカリフの Hārūn ar-Rashid が Harthama を派遣した頃には懐信可汗は死んでいることを指摘して、懐信は Rāfi' b. Layth の乱に介入することができなかつたと主張する。その上で、ソグド語版の 20-22 行目の記事は彼が発見した Ibn Khaldūn が記録したヒジュラ暦 188 年 (803. 12. 20-804. 12. 7) の事件に関連している可能性が高いことを論じている。彼はまた、ウイグルの西征がイスラム圏への侵略を目的としたものではなく、イスラム圏のすぐ東隣りにいてウイグルと激しく敵対していたカルルク、およびカルルクと共謀したチベットの征伐が主な目的であつたことを指摘した。さらに、イスラム世界への関与は政治的・軍事的なものというよりむしろ、マニ教を奉じるウイグルとイスラム教国との対峙という構図ではなかつたかとも推定する²⁹⁾。de la Vaissière の大胆な仮説への批判や、ウイグルは Rāfi' b. Layth の乱と直

29) 彼はこの関連で、al-Nadim が伝える、サマルカンドの王が 500 人のマニ教徒を殺害しようとし

接関与していなかったという指摘は正鵠を射ているであろう。

2 XXII 行目をめぐって

Karev は漢文面で Ibn Khaldūn の記事に対応する記述があるかどうか、あるとしたらどれであるかを検討した。802年に比定される XX 行目の記事や大食国があったと推定される XIX 行目などを考慮しているが、結局十分満足がいく結論に達してはいないように見える。なお漢文面の XXII 行目にカリフを意味する表現を読み取り、ソグド語版と関連させることは 2018 年になってからの我々の新たな提案であり、Karev は参考にするのができなかったものである。XXII 行目に関するこの新しい解釈が正しいとすれば、802年のフェルガナへの侵入 (XX 行目) と、それに続くセミレチエの処分 (XXI 行目) 以降であり、懐信の最晩年の事件であったとも考えられる。ソグド語版には「それで栄光ある帝王は下方へ (=西方へ) 赴かれたときに」とあり、懐信可汗が親征したように書いている。実際にウスルーシャナ付近までやって来て、そこから号令を発したのかもしれない。それが Ibn Khaldūn の記事として記録されている可能性は十分考慮に値しよう。その号令の内容にはマニ教の保護、すなわち Hārūn ar-Rashīd によるマニ教弾圧をやめさせるようなメッセージが含まれていたと考えられる³⁰⁾。ソグド語版の 23 行目に見えるマニ教徒の間に喜びと満足があったという記事はそのことと関係があるのであろう。懐信の最晩年の出来事であるという推定と関連して、ソグド語版の 23 行目の、上で引用した記事の直後に「可汗はまだ崩御しておられなかった」という文が見えている。参考のため、ソグド語版の 22 行目から 23 行目までの翻訳を引用する。

22 行：(1) [敬]意と恐怖から何度も有力な貴人たち(?)と莫大な貢ぎ物を送ってきた。栄光ある (2) 帝王は、下方 (=西方) の国々に計り知れないほど偉大な宗教の [施設を (?)] […大きな破損… (6)] […大きな破損… (7)彼は…] をした。そして全領土において、神である

23 行：(1) [マール・マーニーの宗教] において喜びと満足が生じた。なぜならこの領土において宗教のどんなモニュメントが […ある程度破損…(2) この世界] を (出て) 行ってはおられなかった (=崩御していなかった)。それから神 (のごとき) 王は [… (6)] した。[…大きな破損…(7)]

たとき、それを知ったウイグルの王が領内のイスラム教徒を皆殺しにすると脅してそれを阻止した逸話にも言及する。しかしこれは西ウイグル国時代の事件であったと考えられ、この時代のウイグルとは関係が無い。この逸話については、吉田・古川 2015: 30 参照。

30) Hārūn ar-Rashīd が zandaqa の名で呼ばれるマニ教も含む異端を取り締まったことについては *Encyclopaedia Iranica* の Hārūn al-Rašīd の項目を参照せよ: <http://www.iranicaonline.org/articles/harun-al-rasid>. (2019年9月6日閲覧) 具体的なマニ教徒迫害については Gulácsy 2016: 110-111 も参照せよ。

3 保義可汗の時代の大食国との関係

ソグド語版にはもう一箇所大食の領土という表現が現れる場所がある。

[... ..] 葉護は(或いは：葉護に／を?) 全大食の領土 [... ..]

こちらは、碑石の側面に位置し全体では38行目前後にあたと推定される。これはほぼ確実に保義可汗の時代に比定される。「葉護」はカルルクの支配者を指すから、ここでカルルクの葉護と大食の領土とどのような関連があったのかが問題になる。イスラム史料では Rāfi' b. Layth の乱でカルルクの葉護が反乱軍側についたという記録が Ya'qūbi, *Ta'rikh*, ii, 538にあることは上で述べた。その葉護はカリフ Mahdi の時代にイスラム教に改宗した葉護で、KB 碑文の漢文面の XX 行目で「教令を受けなかった」と言われている葉護その人であったと考えられる。ソグド語版の推定38行目の葉護はその同じ葉護なのかもしれない。時代は810年に終わる Rāfi' b. Layth の乱の終わり頃であろう。そうであれば確かに保義の時代である。その一方で下記注35で言及するように、Ma'mūn の宰相であった al-Faḍl b. Sahl はオトラルを攻めカルルクの葉護の妻子を捕らえたが、葉護自身は Kimāk に逃亡したとされる、その事件がここで記録されている可能性も排除できない。

Rāfi' b. Layth の乱の前後の時期、イスラム圏の東北地域のトランスオクシアナに隣接する地域にいて、イスラム側に脅威となったのはカルルクであったが、ウイグルはそのカルルクと敵対していた。後のカリフ Ma'mūn は Hārūn ar-Rashīd の死後カリフとなった異母弟の Amin と対立し、アッバース朝の東方域のメルブを本拠としていたが、その Ma'mūn は Rāfi' b. Layth の乱の後、810年に彼の立場が脆弱なことを嘆きこう言ったとタバリーに記録されている。

“I have learned, moreover, of the alienation of Khurasan and the restiveness of its populous and desolate [localities]; of the withdrawal of the yabghu [of the Qarluqs] from submission; of the turning away of the qaghan, lord of Tibet; of the mobilization by the king of Kabul for a raid on those places in Khurasan which are near to him; and of the withholding by the Utrārbandah of the tribute which he used to pay. I have no control over any of these things. . . . I do not think that [there is any other way open to me] except the vacating of the place where I am, joining up with the qaghan, the king of the Turks,³¹⁾ and seeking refuge with him and his country; for it would behoove me to guarantee my personal security and be in an impregnable position with regard to those who want my betrayal and defeat.”³²⁾

31) Beckwith 1987: 159, n. 104 はこれ(原文 *khāqān malik al-Turk*) をチベットの王と考えたが、それは誤りでウイグルの可汗に違いないことは de la Vaissière が指摘する通りである [de la Vaissière 2007: 129, n. 346]。それゆえ Beckwith の引用文では king of Tibet となっているところを、原文 *khāqān malik al-Turk* に従って the king of the Turks と修正した。

32) 英訳は Beckwith 1987: 159-160 から。ここでは、敢えて Fishbein 1992: 71-72 から引用しな

つまり隣接するカルルクやチベットは脅威であって、それと敵対するウイグルに庇護を求めるしか方法はないのだと言うような趣旨のことを、Ma'mūn はやや悲観的に述べているように見える³³⁾。これを聞いた大臣の al-Faql b. Sahl は次のように言ったという。

“Write to the yabghu and the qaghan, and appoint the two of them rulers of their two countries, and promise them support in their warfare with the [other] kings. Send some presents and rarities of Khurasan to the king of Kabul and ask him for a truce—you will find him eager to get it. And concede to King Utrarbandah his tribute for this year.”³⁴⁾

ここにカルルクとウイグルに手紙を出すことが言及されている。双方に、各々が有利になるようなこと、例えばウイグルには背後からカルルクを襲う、カルルクには対ウイグル戦の時はカルルクを攻撃しない、あるいは援軍を出すというような趣旨の手紙を書いて送るということであろう。そして実際 Ma'mūn はその忠告を実行に移したという。

Tamīm b. Baḥr がウイグルの宮廷に、そしておそらく Kimāk にも使節として赴いたタイミングとしては、この 810 年の保義の時期でもおかしくないように見える³⁵⁾。無論 Rafī' b. Layth の乱の初期に、反乱軍側だけでなくカリフ側もウイグルに援軍の要請を行った可能性も否定できない。その場合は懐信可汗の治世の末期である。

Minorsky が想定し一般に受け入れられているのは、タバリーに、ウイグルがウスルーシャナに来たとある 821 年の事件と結びつけ、そのときに Tamīm b. Baḥr はウイグルの宮廷に派遣されたとする説である³⁶⁾。Minorsky は Tamīm b. Baḥr が金帳（金のテント）を見ていることに着目した。そしてこの金帳は、唐の公主が可汗と婚姻を結んだときに、中国の職人が製作したものだと考えていた。しかしこの金帳を中国人が製作したとする史料は存在せず、Minorsky の憶測に過ぎないことは上でも述べた。Minorsky の年代比定の根拠が十分に検討されることなく、彼の結論だけが一人歩きしているのは残念である。821 年は保義可汗の没年で、安部 1955: 212-213 によればそれ以降ウイグルは衰退に向かうという。むしろ 821 年に Tamīm b. Baḥr が出発したことを否定することもできないが、セミレチエ方面からモンゴル高原にあったウイグルの宮廷までの駅馬が整備されている時代であれば、何年

↪ かった。この当時の中央アジアの歴史を専門にしている Beckwith の翻訳のほうがより分かり易いと考えたからである。

33) ヴェシエール、エチエンヌ・ドゥ・ラ（影山訳）2019: 287, 逆ページ 55 も参照せよ。

34) ここでも英訳は Beckwith 1987: 159 から。この直後に al-Faql b. Sahl は、もしも戦いに負けたとしても、まだ khāqān の所に身を寄せることが出来ると言っている。

35) Ma'mūn の宰相であった al-Faql b. Sahl は、オトラルを攻めカルルクの葉護の妻子を捕らえたが、葉護自身は Kimāk に逃亡したというから [Beckwith 1987: 162], Kimāk もウイグル同様、カルルクのすぐ背後にいる勢力と認識されていたことが知られる。Tamīm b. Baḥr が使節となって Kimāk を訪問した背景はそこにあったのかもしれない。

36) 821 年にウイグルがウスルーシャナに進軍してきたことと、Ma'mūn がウスルーシャナを攻めたとき、ウスルーシャナの王 Kāvus が息子の Faql を派遣して Turk を呼び寄せたことと関連があると考えられている [Minorsky 1948: 302]。

であってもかまわないように見える。セミレチエ方面にまで勢力が及ぶのはウイグルの絶頂期で、懐信可汗の末期から保義可汗の時代に当たるであろう。ちなみに Tamīm b. Baḥr はウイグルにはマニ教徒が多かったと言っていることは、マニ教の保護を積極的に再開した懐信可汗以前ではあり得ないことを示唆するであろう。ソグド語版には、カリフまでもが何度も有力な貴人(?)や莫大な貢ぎ物を送ってきたと記しているので、まさにその時に Tamīm b. Baḥr はウイグル宮廷を訪れたと考えることもできよう。その場合も懐信の在位の最後の頃であったことになる。

ま と め

Beckwith が言うように、ウイグルが当時のアッバース朝の領内に侵入したり、カリフまでもがウイグルに朝貢したりしたとすれば、それはアッバース朝側にとっても極めて重要な事件であり、必ずイスラム史料に言及があると推定するのは自然である。しかし実際にウイグルが侵入してきたことを伝える確実な記事は、タバリーの 821 年に繫年されるウスルーシャナの記事だけで、保義の最晩年に当たりカラバルガスン碑文の残された部分に、対応する記事が見つかる可能性はない。ただし Karev が指摘する、Ibn Khaldūn が記録したヒジュラ暦 188 年（西暦 803-804）の事件はウイグルの侵入と関係がある可能性がある。その一方で Karev が主張するように、吉田 1988 や de la Vaissière が想定した、Rāfi' b. Layth の乱のときにウイグルが介入・派兵したという事実はなかったと推定される。その事件に対応すると考えられてきたソグド面の 20-22 行目の記事には³⁷⁾、別の歴史的背景を想定しなければならぬように見える。20-22 行目にあるのは懐信可汗時代の出来事であり、821 年の事件ではあり得ないので、Ibn Khaldūn が記録した 803-804 年の事件と関連しているのかもしれない。しかしながら決め手を欠いており、それも一つの可能性に過ぎない。

また Tamīm b. Baḥr が、どのような理由で何時ウイグルの宮廷を訪問したのかも不明である³⁸⁾。Minorsky は 821 年の事件を背景として想定し、その説は一種の定説として一般に受け入れられている。しかし、彼が根拠として使った金帳や唐の公主の降嫁などは、絶対年代を決める証拠と考えるにはあまりに曖昧で特定性を欠いていると言わざるを得ない。ウイグルの絶頂期で、セミレチエからの駅伝の制度が機能していた、懐信可汗の末期から保義可汗の治世であれば、いつでも良いように思える。本稿では、ソグド語版の 22 行目に見える、

37) おそらくそのソグド語版の記事に対応する漢文版の XXII 行目の記事も、Rāfi' b. Layth の乱とは関係がないであろう。

38) 840 年以前のウイグルに関するイスラム史料については de la Vaissière 2016 も参考になる。例えば、Tamīm b. Baḥr の旅行記も含め、このような東ウイグル可汗国に関する情報がイスラム史料に残っていることこそが、懐信と保義の時代の西方侵入に対するアッバース朝側の対応の記録なのかもしれない。

21 行

(1) [x]š'w'nyh (pyz)t ZY p(r)šk'r wm't ZY prnpōy 'xšy-w'nk c'nkx c'ōr xr'mtō'rt kw xwr's'n xm'yr ZY kw (n)[y (2) γr](β')wt'kcykt xm'yr ZY 'xš'w'nō'r s'r prm'n'h (pr')šy wys'nt [ある程度破損 (6)](n)γ'wš'kt [大きな破損 (7)] mwmyn xm'yr prm MN prnxwnt'kw 'xšy-w'nk (次行に続く)

(1) 領土に、弾圧と迫害があった。それで栄光ある帝王は下方へ (=西方へ) 赴かれたときに、ホラーサーンのアミールと他の (2) 多くの国々のアミール及び支配者たちに命令を發した。彼ら [〈ある程度破損〉(6)] 聴者たち (=マニ教の一般信者たち) [〈大きな破損〉(7)] カリフまでもが栄光ある帝王に対する、〈次行に続く〉

22 行

(1) [p](š) ZY pckwryy [γ](r)β prw'rt'k 'rp'st'k ("z'ty)t ZY (γr)'n nm'ck'n βšmtw ō'r'nt c'nkx p(rnxw) [nt'k (2)] 'xšy-w'nk prw c'ōr 'wt'kt wyptm'kw γr'n ōnymyncw (p)[ts'k ある程度破損 (6)](•) s'r (…)[大きな破損 (7)]tō'rt ZY ZKwy mγ-wnw 'xš'w'nyh pr βγ(y) (次行に続く)

(1) [尊]敬と恐怖から何度も有力な貴人(?)と莫大な貢ぎ物を送ってきた。栄光ある(2)帝王は、下方 (=西方) の国々に計り知れないほど偉大な宗教の [モニュメントを (?)] (ある程度破く)

23 行

(1) [m'rm'ny ōynh wγ](š)y ZY xws'nty-'kh 'krty p'rZY (pry)-myō 'xš'w'nyh cw ōnymyncw pts'k (…)[(2) β'c'np] ōy xr'mty L' wm't pts'r c'nkx βγy 'xšy-w'nk [ある程度破損 (6)](ō)'rt [大きな破損 (7)]'(w•)[]

(1) [マール・マーニーの宗教] において喜びと満足が生じた。なぜならこの領土において宗教のどんなモニュメントが [〈ある程度破損〉(2) この世界] を (出て) 行ってはおられなかった (=崩御していなかった)。それから神 (のごとき) 王は [… … (6)] した。[〈大きな破損〉(7)]

24 行

大きな破損(2) c'ōr ctβ'r kyr'n p(……………)[
[〈大きな破損〉] (2) 下方 (=西方) の四方に [〈大きな破損〉]

推定 *38 行

推定 38* 行 […………t] ypyw mγ-wnw t'z-'yk'n'k 'xš'w'nh [
…葉護は全大食の領土…

参考文献

- Bailey, H. W. (1961) *Khotanese texts IV*, Cambridge.
 Beckwith, Ch. I. (1987) *The Tibetan empire in Central Asia*, Princeton.
 Bosworth, C. E. (translated and annotated by) (1987) *The history of al-Ṭabarī*. Volume 32: *The reunification of the 'Abbāsīd Caliphate*, New York.
 Fishbein, M. (translated and annotated by) (1992) *The history of al-Ṭabarī*. Volume 31: *The war*

- between brothers*, New York.
- Gorden, M. et al. (eds.) (2018) *The works of B. Wadih al- Ya'qubi. An English translation*, vol. 3, Leiden/Boston.
- Grenet, F. (1989) "Les 'Huns' dans les documents sogdiens du Mont Mugh", in C. -H. de Fouchécour & Ph. Gignoux (eds.), *Études irano-aryennes offertes à Gilbert Lazard*, Paris, 165-184.
- Gulácsi, Zs. (2016) *Mani's pictures. The didactic images of the Manichaens from Sasanian Mesopotamia to Uygur Central Asia and Tang-Ming China*, Leiden/Boston.
- Karev, Y. (2015) *Samarqand et le Sughd à l'époque 'Abbaside. Histoire politique et sociale*, Paris.
- La Vaissière, E. de (2005) "Huns et Xiongnu", *Central Asiatic Journal* 49/1, 3-26.
- La Vaissière, E. de (2007) *Samarcande et Samara. Élités d'Asie Centrale dans l'Empire Abbaside*, Paris.
- La Vaissière, E. de (2016) "Idrisi on the Uighur Empire. A description of Qaraqorum and Baybaliq", *Turcica* 47, 399-405.
- Minorsky, V. (1948) "Tamim b. Baḥr's journey to the Uyghurs". *BSOAS* 12/2, 275-305.
- Skaff, J. K. (2012) *Sui-Tang China and its Turko-Mongol neighbors, culture, power, and connections, 580-800*. Oxford / New York.
- Skjærvø, P. O. (2008) "The end of eighth-century Khotan in its texts". *Journal of Inner Asian art and archaeology* 3, 2008 [2009], 119-144.
- Yoshida, Y. (2009) "The Karabalgasun Inscription and the Khotanese documents", in D. Durkin-Meisterernst, Ch. Reck, and D. Weber (eds.), *Literarische Stoffe und ihre Gestaltung in mitteliranischer Zeit*, Wiesbaden, 349-360.
- Yoshida, Y. (2018) "Farewell to «Teacher of Four TWTRYST'N»", in Zs. Gulácsi (ed.), *Language, society, and religion in the world of Turks : Festschrift for Larry Clark at seventy-five*, (Silk Road Studies XIX), Turnhout, 267-279.
- Zhang Zhan (2018) "Secular Khotanese documents and the administrative system in Khotan", *Bulletin of the Asia Institute* 28, 57-98.
- 安部健夫 (1955) 『西ウイグル国史の研究』京都.
- ヴェシエール, エチエンヌ・ドゥ・ラ (影山悦子訳) (2019) 『ソグド商人の歴史』東京.
- 華濤 (2000) 『西域歴史研究』上海.
- 佐口透他 (訳注) (1972) 『騎馬民族史』 2 (東洋文庫 223) 東京.
- 羽田亨 (1919) 「九姓回鶻と Toquz Oγuz との關係を論ず」『東洋學報』 9/1, 1-61 (『羽田博士史學論文集 上卷歴史篇』京都 1957, 325-394 に再録) .
- 田坂興道(1941) 「漠北時代に於ける回紇の諸城郭に就いて」『蒙古學報』 2, 192-243.
- 森安孝夫・吉田豊 (2019) 「カラバルガスン碑文漢文版の最新校訂と訳註」『内陸アジア言語の研究』 XXXIV.
- 吉田豊 (1988) 「カラバルガスン碑文のソグド語版について」『西南アジア研究』 第 28 号, 24-52.
- 吉田豊 (2006) 『コータン出土 8-9 世紀のコータン語世俗文書に関する覚え書き』 (神戸市外国語大

学研究叢書第38冊) 神戸.

吉田豊 (2011) 「ソグド人と古代チュルク族との関係に関する三つの覚え書き」『京都大学文学部研究紀要』50, 1-42.

吉田豊 (2017) 「コータンのユダヤ・ソグド商人？」土肥義和・氣賀澤保規編『敦煌・吐魯番文書の世界とその時代』東京：東洋文庫, 263-285.

吉田豊 (2018) 「貨幣の銘文に反映されたチュルク族によるソグド支配」『京都大学文学部研究紀要』57, 155-182.

吉田豊・古川攝一(編)(2015)『中国江南マニ教絵画研究』京都.

(京都大学文学研究科)